

樹木医 塚本こなみさん

木を診断し、守り、育て、愛情をそそぐ

日本で最初に女性樹木医になった塚本こなみさん。

木を慈しみ、木に語り掛け、木を育てることに全力を傾ける。とりわけ巨木や古木の移植では、達人として全国に広くその名を知られ、一方ではフラワーパークの経営再建人としての顔も持つ。これからは「園芸療法で木だけでなく人にも元気になって欲しい」と語る。

樹齢500年の 五葉松の移植に挑む

「これはうちにはちょっと……」

集められた造園会社や植木会社の責任者十数人は、口々にそう言った。

高速道路の建設で用地を買収しようとしたところ、地主がひとつの条件を出した。対象となっている土地に生えている樹齢500年の五葉松を新しい土地に移植させることができるなら、土地を売ってもいい、と。そこで高速道路会社は地域の造園会社や植木会社を集めて、移植が可能かどうか打診したのだった。

だが、樹齢500年の五葉松となれば天然記念物並みのもの。うっかり傷つけて枯らせたりしたら大変なことになってしまう。しかもこの松は砂地に生えていた。掘り出して運ぶときに砂が落ち、一緒に根も落ちたりしたら、たとえ移植できたとしても枯れてしまう危険性が高い。造園会社も植木会社もリスクの高さに二の足を踏んでしまったのだ。

そこで高速道路会社は専門家にこ

の松の査定を頼み、7,000万円を払うから松を切らせて欲しいと地主に申し出た。だが地主は「祖父も父も私もこの松を見て育った。松を切るとはできない」と断固拒否した。どうにも困った高速道路会社が頭を抱えているところに入ってきたのが、塚本こなみさんについての情報だった。「樹木医の資格を持ち、藤棚の広さが600平方メートルにもなる巨大な藤の移植を成功させた人がいる」

そうして塚本さんのところにこの松を移植して欲しいという依頼が舞い込んできたのだった。

「一目見て、この松が健康であることは分かりましたので、直観的に移植は可能と判断してお引き受けしました。地主の方も『この人なら』と信頼してくださいました」

樹齢500年の五葉松を移植する一大プロジェクトが、こうして始まったのである。

鉄製の巨大な植木鉢をつくる

木は、幹の一番外側の層が細胞分

裂して生きている。この部分の層が根や葉とつながり、葉が光と二酸化炭素と水で糖分をつくって成長していく。幹の内部は生きた細胞ではなく、材という物質になっている。だから幹の内部が空洞になっても木は生き続けることができる。逆に言うと木を移植するときには、外皮を傷つけないことが重要になる。

そこで塚本さんは幹の外側を包帯で巻いてその上を石こうで固めることにした。つまり、ギプスを巻くのである。これは藤の移植などですでに何度か経験したことのある方法だった。こうしておけば木を吊り上げるときにロープで幹の外皮が傷つくのを防ぐことができるのだ。

もうひとつ大事なことは、引越しの根をつくっておくことだ。

木は常に水を吸い上げていないと生きていけない。水を吸い上げるのは根の先端だ。だから移植時に根の先端を全部切ってしまったら、水を吸い上げられなくなる。そこでまず全周の3分の1、120度分の根を切り、処理をしておく。そうすると3分の2



つかもと こなみ 1949年、静岡県生まれ。1992年、女性としては初めての樹木医に。特に巨木や古木の移植を得意とし、あしかがフラワーパークの巨大な藤の木の移植を成功させたことで、業界ではつとに有名。フラワーパークの経営再建でも辣腕を振るう。公益財団法人浜松市花みどり振興財団理事長でもある。



塚本さんは木々のことを彼らとかあの子と言う。彼らが見事に咲く、あしかがフラワーパークの大藤。



30センチ幅の「く」の字型の鉄板を差し込み、根の周りを植木鉢のようにして囲む。



根を傷つけないように慎重に掘り起こす。



10トンのクレーンで持ち上げられ、200メートル先の移植場所へ移動する樹齢500年の五葉松。

の根は切っていないから十分水を吸い上げることができる。切った根の先端からも新しい根が出てくる。1年後、次の3分の1の根を切って同じように処理をする。そしてまた1年後、同じ作業をする。つまりこの松の移植は3年がかりの大仕事になったのである。

では、もうひとつの難問、砂地に生えているという問題はどうか解決したのか。

「30センチ幅の『く』の字型の鉄板をたくさんつくり、根の周りに差し込みました。そして運ぶときはその鉄板を全部溶接しました。つまり巨大な鉄製の植木鉢をつくったわけ

です。ただ植木鉢のように底には穴が開いていますから、そのままだと砂が落ちてしまいます。だから運ぶ前日にたっぷり水をかけておきました。そうすると砂と砂の粒子がしっかりくっついて、砂が固くなるのです」

こうして3年がかりの松の移植は完了。松の持主も高速道路会社も、ただただ塚本さんに感謝するばかりであった。

樹木医になって気がついたこと

1992年、塚本さんは試験に合格して樹木医の資格を取得した。樹木医の資格制度ができたのはその前年のこと。初年度は女性の受験者がいなかったの、女性樹木医の第1号となった。

塚本さんが造園業を営むご主人と結婚したのは1971年のこと。樹木医になったときはすでに20年の造園経験があった。だが、樹木医になって初めて「自分が木のことを知らないことに気がついた」という。

「木を植えて育てていくことはできましたが、木を見て診断する力はありませんでした。女性樹木医第1号と

いうことでメディアの取材がたくさん来ましたが、何も知らないのにスポットライトを浴びて恥ずかしい気持ちでいっぱいでした。これではいけないという思いで、そこから猛勉強しました」

大自然にある樹木は、極力、自然の力で治したい。そう考えた塚本さんは、自分でいろいろな治療法も考え出した。木の幹に空洞ができたならそれまではコンクリートや発泡ウレタンを充填していたが、「そんなことをしても木が喜ぶとは思えない」から泥や炭を使うようにした。緊急の場合には農薬などを使うこともあるが、できる限り自然の資材を使う



はままつフラワーパーク。木が元気な理由は職員が深い愛情で育てているから。

のが塚本さんの流儀だ。西洋医学ではなく、東洋医学を目指したというわけである。

「今は木を見て、触るだけで、健康なのかどうか、どういう育ち方をしてきたのか、木が何を求めているか、だいたい分かります」

フラワーパークの経営再建も

1994年にはあしかがフラワーパークにあった巨大な藤の木の移植を頼まれ、2年がかりでこの大仕事をやってのけた。そして、これをきっかけに塚本さんは同フラワーパークの園長に就任。収益が悪化していた経営を再建した。その経営手腕が見込まれ、2013年からは、はままつフラ

ワーパークの再建にも取り組んでいる。

「ここはアップダウンが多いので、電動のシニアカーを用意したりエレベーターを設置したりしました。過去のデータを見て、お客さまの少ない7～9月は入園料を無料にし、3月から有料として梅が咲いたら700円、桜が咲いたら900円といった美しさに応じた変動料金制を取るようになりました」

そうした改革が功を奏し、以前は年間25万人前後だった入園者は今や50万人を超えるまでに増えている。

一方では長年にわたり修得してきた知見や技術の伝承にも取り組んで

いる。特に藤については専門家が少ないため、講習会などを開いて積極的に指導している。今は藤のことを学ぶために台湾からはままつフラワーパークへ研修に来ている人もいる。

そんな塚本さんが、これから力を入れたいというのが園芸療法だ。

「引きこもりの方を何人かお預かりして、植物の世話をさせていただいたり

しています。1年半お預かりしている方は少し笑顔が戻ってきて、言葉も出るようになってきました。自分が植えたり育てたりした植物を、お客さまが見て『きれい』と言ってくれたら、自信がつき、生きていく力になります。そういう人のために、一般のお客さまの目には触れない場所に温室も2棟、建設しました。園芸の技術を身に付けてここで働いて社会復帰のきっかけになるような職場をつくるのが夢なんです」

木を慈しみ、自然を愛し、人に救いの手を差し伸べる――。

塚本さんはこれまでも、そしてこれからも、生きとし生けるものすべてに深い愛情を注ぎ続けていくのだろう。